

レーラインの鍵盤楽器教本研究 5

—運指教程についての研究 2—

小野 亮 祐

(本講座大学院博士課程後期在学)

はじめに

本研究は筆者が継続的に行っているレーラインの鍵盤楽器教本研究の一つである。レーラインの教本とはG.S.Löhleinによって1765年に初版が著された後、1848年発刊の第9版まで延べ8回の改訂を経て1世紀弱にわたって出版され続けた教本である。本稿ではレーラインの鍵盤楽器教本の第7版から第9版までの運指教程にかかる部分の検討ならびに改訂に伴う変化を追うことを目的としている。

1. 第7版での指使い教程

第7版は第6版に引き続きミュラーA.E.Müller(1767-1817)が改訂を担当し1819年に出版された。しかしながら出版社が記した前書きによれば、改訂作業の半ばにミュラーが亡くなっており、巻末付録の通奏低音教程については改訂が全く行われなかったのだが、その他の部分についても彼の死の影響があったのかは記されていない。指使い教程にも何らかの影響があったかもしれない。

1) 教本全体の中の位置

第7版では指使い教程は第7章「指使いについて」と題されpp.32-271を占めている。第6版では同程度の内容量で第8章を占めていた。第7章への変更は、第6版では第6章：装飾音について、第7章：拍子について、第8章：指使いについて、となっていたのに対し、第7版では第6章：拍子について、第7章：指使いについて、第8章：装飾音について、と順序が変更されたことによるものである。

2) 指使い教程の構成

この教程自身の構成はおおむね第6版と同じで、初めに文章による説明があり、その後およそ千あまりの練習用楽句・曲が続く。文章による説明の部分と練習曲の部分に分けて、教程の構成内容を見ていくこととしよう。

文章説明の構成とその内容

文章説明による部分の構成は第6版とほとんど変わっていない。よって第6版の指使いの教程を取り扱った既出の拙稿²によれば§1で指使いの定義を、§2で運指規則を、(その詳細は、a)同じ鍵盤の連続打鍵、b)跳躍進行時の親指の使用法、c)同一指による連続打鍵の禁止、d)指の交差：音階的進行、e)弾き初めに親指を用いる原則、f)指の省略、g)跳躍の指使いである。) §3練習曲についての説明となる。

わずかに異なるのは§2のd)のなかで、親指が小指と交差して越えるときについてである。第6版では親指が小指と交差することを禁じているが、第7版ではどうしても必要な場合は許されると変更されている³。

¹レーラインの教本 第7版 Vorrede s.III

²小野亮祐 レーラインの鍵盤楽器教本研究4—運指教程についての研究1—『広島大学大学院教育学研究科紀要 第2部第56号』2007.12 P.303-371

³レーラインの教本第6版(s.50)と第7版(s.35)の該当箇所を引用する(イタリック部分は変更箇所、括弧の中は変更後第7版の内容): Das Untersetzen des Daumens nach dem fünften Finger, wie auch das Ueberschlagen des fünften über den Daumen, ist fehlerhaft (kann nur im Notfall), weil dadurch die Hand zu sehr gewendet werden muß(muß, gestattet werden.). Aus dieselben Grunde(Auch) vermeide man

練習曲部分の構成とその内容

§ 3 に続く練習曲部分の構成は第 6 版と全く同じである。表 1 はその構成である。

出版社による前書きには、「著者の改訂の結果として、目的にかなった練習曲の順番や量について最も簡単なものから最も難しいものへ、自由な書法のもの、厳格な書法のものも他の教本に追随するものがない」と述べており、ミュラーは練習曲について力を入れたものと考えられる。

紙面の関係で千曲あまりある練習曲のすべてを検討する訳にはいかないが、各練習項目について第 6 版からの配列上の変更点をいくつか挙げてみたい。

1 声の練習である 1) の部分では比較的全体的に入れ替えや、曲の追加削除が行われている。それに対して、2a) で

は第 1—32 曲の中では追加削除は少ないが大幅に順番の入れ替えが行われる。それ以降は第 6 版の順番を完全に維持しながら、最後の 352 曲目まで合間に追加削除が行われている。

2b) では初めの 17 曲は全く同じであるが、それに続く音階練習で大きな変更が行われている。第 6 版では各調の音階が単純に主音から 2 オクターブ上行した 2 オクターブ下行し元に戻るだけである。しかし、第 7 版ではそれ以外に 3 つのパターンを付け加え一つの調に対し 4 つのパターンの音階練習がある。それから音階練習を中心とした練習曲が 176 曲目までは第 6 版と全く同じであるが、177 曲目からは中断し第 6 版の 187 曲目からのアルペジオの練習が前倒しされてここに割り込み、また元に戻る。このことは音階やアルペジオといった練習目的のはっきりした練習曲を前に集中させて、様々な指使いが混合する曲を後ろにまとめなおしたものと思われる。

3) では 62 曲あるうち 40 曲までは順番の入れ替えと追加が見られるが、それ以降はほぼ 6 版の通りである。

4) は第 6 版のものをそのままに引き継ぎ、冒頭に 6 曲新曲を追加している。5) と 6) は共に第 6 版のものをそのままに引き継ぎ、合間に数曲新しい練習曲を挿入している。7) 以降は第 6 版と全く同じものとなっている。

以上のことから順番の検討・変更など比較的手の込んだ改訂が行われたのは 3) までで、他は数曲の追加ないし全く手が入れられていなかったことが分かる。このことは 4) 以降の教程に手を入れる必要がなかったことであろうが、おそらく付録の通奏低音に手を付けられなかったのと同様に、練習曲の改訂中にミュラーの体調悪化であまり手が付けられずじまいとなったのではないかと考えられる。いずれにしても各曲の詳細な分析が必要であるがこれについては他日を期したい。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1) 手のポジション移動のない一声の運指練習2) 手のポジション移動を伴う一声の運指練習<ol style="list-style-type: none">a) 指の交差をさせない場合b) 親指を人差し指、中指、薬指が飛び超える場合。音階練習含む3) 手のポジション移動のない 2 声の運指練習4) 手のポジション移動を伴う 2 声の運指練習5) 手のポジション移動のない 3 声の運指練習6) 手のポジション移動を伴う 3 声の運指練習7) 手のポジション移動のない 4, 5 声の運指練習8) 手のポジション移動を伴う 4, 5 声の運指練習9) 両手を交互に用いる場合、両手で音域が重なる場合、両手を交差する場合の運指<ol style="list-style-type: none">a) 両手を交互に用いるときの練習曲b) 両手で音域が重なり合うときの練習曲c) 両手が交差する場合の練習曲 |
|---|

表 1：第 6, 7 版の練習曲の構成

2. 第 8 版での指使い教程

1) 教本全体の中の位置

第 8 版は 1825 年チェルニー Carl Czerny によって改訂出版された。チェルニーは第 7 版の章立てをそのまま引き継いでいるので、教本全体での指使いに関する教程の位置づけは全く第 7 版と同じである。指使いの項目の改訂について前書きで以下のように記している⁵。

⁵ レーラインの教本 第 7 版 Vorrede s.IV

とりわけ指使いの章は大幅に変更拡大している。古くなりまたは目的に合わない練習曲を取り去ってその代わりに、音階練習の教程（以前の版では音階の教程についてはすべてを取り扱われていなかった）を指の動きの巧みさを向上させるための主要項目として取り上げている。これは、私の長年の幾重もの試みを基礎に作り上げられたものである。

構成については触れられてはいないものの、チェルニーが指使いの章の改訂に力を入れると共に、特に音階練習について新たなものを盛り込んでいることが記されている。

2) 指使い教程の構成

第8版は第6・7版の構成を引き継ぎ、初めに文章による運指法についての解説があり、その後に練習曲が続いている。以下この二つの部分に分けて検討を進める。

文章部分の構成とその内容

3つの§（段落）からなっている。§1並びに3は第7版と全く同じ、§2は小項目のいくつかに異同が見られる。

§2にはa)~k)までの小項目がある。そのうちf)以下は第7版までのc)以下と同一である。§2のa)~e)の内容を以下に記す

- a)原則的には異なる指を用いて演奏する（同じ指の連続使用の禁止）
- b)同音反復での指使い（同一指による連続打鍵の禁止の原則）
- c)音階的進行での指使い（親指の交差を含む）
- d)親指による黒鍵の打鍵の禁止とその例外
- e)小指の使用について（第7版§2bの後半s.49の転用）

第7版の§2a)とb)を以下に挙げる

- a)同じ鍵盤を連続して打鍵するときは異なる指を使う
- b)オクターブなどが必要な跳躍進行の時のみ黒鍵で親指が使える

上にあげた第7版と8版の比較すると第7版のb)の内容はほぼそのままといえるが、a)は最も基本的な事項が追加されたと考えて良いだろう。d), e)は第7版のb)をより詳述し親指と小指の場合に分けたものといえる。c)はチェルニーが音階の指使いに力を入れていることにより新たに追加された事項であろう。

総じてより基礎的な事項を詳細かつ丁寧に述べ、教程の中心である音階の指使いについて補強することがこの部分の改訂の方針であると考えられる。

練習曲部分の構成とその内容

全体的な構成は第7版とほぼ変わらない。ただし第7版の「2)手のポジション移動を伴う一声の運指練習」が第8版では「すべての調の音階の教程Das Studium der Skalen in allen Tonart」と変更されている。この部分が前書きに記されていた音階練習の教程の部分である。また、最後に注釈としてそのほか授業併用練習曲について書き記されていることも新出事項である。

「1)手のポジション移動のない一声の運指練習」における練習曲の数が、105曲第7版から34曲第8版に極端に減っている。これは、前書きにもあったように目的にかなっていないか古くなったものが多いとして削減された結果と推測されるが、詳細な分析は他日に期すとしていたい。

また3)以下の練習曲に関しては第7版を全くそのまま引き継いでおり、チェルニーの手が入った部分は1), 2)の部分のみであるといえる。

音階の教程の部分に少し立ち入ってみることにしよう。ここでは§4~6が新設され、§4では音階練習の重要性、§5では3つの均一性（早さ、打鍵の強さ、音価）について述べられ、§6ではレガートとスタッカートの奏法について述べられる。これに引き続き、すべての調の音階練習が続く。そして音階ごとに表2の課題が課せられる。そしてその調性配列は長調の4度圏であるが、長調ごとにその平行短調が差し挟まれている(表3)。

これに引き続いて、§7：並進行の練習、§8：右手と左手で反進行する音階での指使いの説明と対応する練習曲が付けられる。そしてこのあとには7の和音の練習曲が全調続き、その後に仕上げとして第7

³ レーラインの教本 第8版s.III

表 2 : 音階練習の課題一覧

片手の課題

No. 1 : 音階片手

No. 2 : 分散和音片手

No. 3 : 様々な位置からの音階

No. 4 : ドッペルシュラク的指使い

No. 5 : 半音階

両手の課題

No. 1 : 音階片手

No. 2 : 分散和音片手

No. 3 : 様々な位置からの音階

No. 4 : ドッペルシュラク的指使い

No. 5 : 半音階

7 の和音を伴った次の調への移行部

表 3 : 音階練習の調性の順番

C dur→A moll→F dur→D moll→B dur→G moll
→Es dur→C moll→As dur→F moll→Des Dur→
B moll→Fis dur→Dis moll→ H dur→Gis moll→
E dur→Cis moll→A dur→Fis moll→D dur→H
moll→G dur→E moll→Uebergang in Cdur→
Schluss in C dur

版の「2）手のポジション移動を伴う一声の運指練習」からNo.165～176がそのまま転用されて掲載されている(表3)。

3. 第9版での指使い教程

第9版は1848年にクノールJulius Knorrによって改訂されて出版された。レーラインの教本の最終改訂版である。本教本は2分冊で、第1巻は楽器、楽譜、指使い、演奏について、装飾音についての説明があり、第2巻は練習曲を中心にした指使いの訓練となっている。よってここでは、第1巻に含まれる指使いに関連する章と、第2巻全体の検討が中心となる。

1) 全体の中での指使い教程の位置づけ

表4は第1巻の内容構成である。下線部は、指使いの教程に関連する項目である。従来の版と大きく異なるのは、指使いに関わる教程が一つの章にまとまっておらず、分かれていることである。さらに従来の版では、前半が楽器の基礎知識、楽譜のことなど楽典事項を占め、そのあと実践編として指使いの教程へと移っていたのに対して、この第9版では楽譜についての説明の前に一つめの指使いに関する項目(6. 手のポジション移動のない練習)が、さらには音符の音価や変位記号についての説明の前に練習曲(8. 初心者のための小品)がおかれている。

第1巻の指使いの教程に関するそれぞれの項目の内容を検討し、それらの位置づけを検討してみたい。

2) 練習曲の配列

「6. 手のポジション移動のない練習」の内容構成

この項目は§21~30の段落番号が与えられている。§21は本節で指の独立した堅固な打鍵を目的としていることを述べ、引き続き各§一つずつ合計12の練習課題が譜例とその下に指番号付きで現れる。

12の練習曲の課題は表5の通りである。

表 4 : 第9版第1巻の内容構成

前書き、1. 導入、2. 調律について、3. 初めての授業について、4. 鍵盤について、5. ピアノフォルテ奏者の一般的な規則、6. 手のポジション移動のない練習、7. 楽譜と音部記号について、8. 初心者のための小品、9. 音価について、10. 変位記号について、11. 音程、12. 調性と調号、13. 音階、14. 和音について、15. 演奏上の記号、16. 略号について、17. テンポについて、18. 拍節について、19. リズムについて、20. 指使いについて、21. そのほかの機械的な練習曲、22. 鍵盤楽器曲(続き)、23. 装飾音、24. 演奏について

表 5 : 1 2 の練習曲と課題

- § 22 4本の指で鍵盤を押さえたまま残った一本の指を連続打鍵する練習（全指）
- § 23 3本の指で鍵盤を押さえたまま残った二本の指を連続打鍵する練習（全指）
- § 24 五度の範囲で音階的進行（上行、下行ともに）
- § 25 五度の範囲で跳躍練習（練習曲4種）
- § 26 三連符の練習（練習曲2種）
- § 27 すべての指でトリル練習
- § 28 三度の同時連続打鍵練習
- § 29 三度の並進行
- § 30 指使いの訓練のための機械について（ギド・マンについて・練習曲はなし）

「8. 初心者のための小品」の内容構成

§ 39に前置きがあって、以下 § 42まで練習曲と補足説明が付けられている。その内容は表 6の通りである。

表 6 : 初心者のための小品

- § 40 五度の範囲での練習曲、教師と生徒の連弾（モシェレスの連弾曲）。
- § 41 ト音記号のみで書かれた練習曲 28 曲（第 21 曲からは発想記号の付いた楽曲）
- § 42 ヘ音記号とト音記号で書かれた練習曲 6 曲（1 曲目はミュラーによるヴァリエーション）

§ 40では5度の範囲で生徒が拍節をとりやすいように初めに教師との連弾曲を生徒に与えることを奨めている。§ 41ではト音記号のみで書かれた5度の範囲を中心とした2手用の練習曲が続くが、第19曲目から親指の交差を伴う一オクターブにわたる音階進行など、既修の事項を越える技術を要求するものが出ている。また、21曲目からは発想記号の付いた練習曲が連なり、練習のためのフレーズではなく、いわゆる楽曲としてのまとまった体裁をなしている。

§ 42の練習曲からは、それまでの指使い練習曲ではなく、ヴァリエーションなどいわゆる「楽曲」の体裁を示している点を引きつぎつ新たにヘ音記号を伴っている。

「20. 指使いについて」と「21. その他の機械的な練習曲」の内容構成

「20. 指使いについて」の内容構成は表7の通りである。「6. 手のポジション移動のない練習曲」とは違って、練習をさせるのではなく指使いについての説明に終始しているのが本章の特徴である。特に後半は指の交差に重きが置かれている。

これに続いて「21. そのほかの機械的な練習曲」があらわれる。その構成は表8の通りである。前項で重点項目でもあった指の交差の練習に半分を費やしており、前項の説明に対する補充練習といえよう。また、ポジション移動を応用して、これまで説明や練習がなかった和音の運指練習が続いている。

表 7 : 指使いについて

- § 97 テクニックを発展での指使い(Applikatur)の必要性
- § 98 同一指による連続打鍵の禁止
- § 99 § 98 の例外について
- § 100 同位置鍵盤の連続打鍵について
- § 101 ポジション移動がない場合の指使いについて
- § 102 親指と小指の黒鍵の打鍵について
- § 103 指の交差をしない手のポジション移動
- § 104 指の交差
- § 105 黒鍵上での親指の使用について
- § 106 親指と小指の交差の禁止
- § 107 3の指が4の指をもしくは4の指が3の指を越えること原則禁止
- § 108 指の交差の例外について
- § 109 同じ音型の繰り返しでの指使い

表 8 : そのほかの機械的な練習曲

- § 110 音階で親指を交差すること。
- § 111 半音階の練習
- § 112 和音（複数音を同時に打鍵する）練習
- § 113 分散和音

「22. 鍵盤楽器曲（続き）」の構成

§ 42の小品の続きの曲が20曲この項目に含まれ、今や中程度の難しさの端緒についていることが冒頭に述べてられている。全20曲の内訳は表10の通りである。クラマーの指の練習曲を合間に差し挟みながら、カルクブレンナー、ベルティーニ、マイヤー、ヒュンテン、クーラウなどの楽曲などで占められている。

表 9 : 鍵盤楽器曲（続き）の曲目

- I.Andante con Variations (F. Kalkbrenner) II.Andante (V. Belliak)
- III: Fingerübung(J.B.Cramer) IV. Fingerübung(J.B.Cramer)V. Allegro (Bertini)
- VI.Moderato(F. Hüntten) II. Fingerübung(J.B.Cramer) VIII. Fingerübung(J.B.Cramer)
- IX.Allegro con Variations(Fr. Kuhlau) X. Allegro con Variations(Fr. Kuhlau)
- XI. Vivace(H. Bertini) XII. Allegro con Variations(H. Bertini) XIII. Moderato
- XIV. Moderato XV. Andantino con moto XVI. Vivace XVII. Allegretto XVIII. Allegro
- XIX. Allegretto un poco vivo XX: Valse(Ch. Mayer)

第 2 巻の内容構成

第 1 巻の § 114 に「第 2 巻が提供しているような機械的な作品」と書かれているように、第 2 巻は機械的な指の訓練曲がほとんどを占めている。全体は10章に分けられ、それぞれ一つの課題を掲げそれに対応して練習曲が含まれている(内容構成の一覧は表10参照)。

第 1 巻で取り上げられた課題が再び取り上げられているが、ここでは徹底した実践練習を行うことが目的とされている。第 8 版までの練習曲部分はシステムティックに構成されていたのに対して、第 9 版ではそのようなシステムティックさはない。第 1 章がポジション移動を伴い、第 2 章以降がポジション移動を伴う点で明確な区分は出来るが、それぞれ特定の指使いについての解説・習得となっている。

表 10 : 第 9 版第 2 巻の内容構成

- 第 1 章 : 手のポジション移動のない練習、第 2 章 : 音階練習、第 3 章 : 指の交差を伴わないパッセージ (ポジション移動を伴う)、第 4 章 : トリル、第 5 章 : 音程から生み出されるパッセージ、第 6 章 : 並進行、第 7 章 : 和音、和声のパッセージ、第 8 章 : 厳格書法による対位的作品の練習、第 9 章 跳躍について、第 10 章 : 手の交代・挿入・交差

4. まとめ

本稿ではミュラー 2 度目の改訂版の第 7 版、チェルニーが改訂した第 8 版、クノールが改訂した第 9 版の指使いの教程とそれにかかわる練習曲の部分を概観した。既出の拙稿でも述べたとおり、第 5 版からは指使いに重きを置くようになり、第 6 版では膨大な練習パッセージ・曲をシステムティックに整理するといった形になっていた。第 7 版の改訂では膨大な練習曲を伴うシステムティックな構成方針を変更することではなく、練習曲を整理整頓することが改訂作業の中心だったといえる。それに続く第 8 版でも大きな構

⁶ レーラインの教本 第 9 版 s.46

成上の変更は見られない。指使いの章の前半部分にある文章による説明の改訂作業は、若干基本的な説明を追加し、また理解しやすいように項目分けをすることであった。続く練習曲部分では改訂者自身が鍵盤楽器教授で行ってきた音階練習に重点を置いて充実拡大しているが、それは第6、7版の「手のポジション移動を伴う一声の運指練習」の部分であり、元来第6、7版でも音階練習はそこに含まれていた。つまり、同じ教授目的をもちながらその手段を音階練習を中心にしたとあって良いだろう。

第9版は全体の構成の点で全く従来の版と異なっている。それまでの版は、暗黙の了解のように前半は理論を解説しその後実践編として指使いの教程を一つの章にまとめることが通常であった。しかし、第9版では楽譜の説明が始まる前に「片手のポジション移動を伴わない練習」の項目が差し挟まれるなど、明らかに従来と方針が異なっている。また指使いの教程の構成の点では、まず初めに指使いの規則についての文章の説明を行ってから実践練習に入るというのが初版から第8版まで貫かれていた原則であった。しかし第9版では文章による指使いの規則の説明は「手のポジション移動を伴う一声の運指練習」の後に現れており、従来の原則が打ち破られている。

また、練習曲に関しても第6、7、8版での練習曲は指の訓練用に特化されたパッセージや曲だったが、第9版ではそれに限らず「楽曲の体裁」を持つ練習曲がまとまっておかれている。これは第6版～第8版まではひたすら機械的な指の練習によって指の強化をすることを目的とし、またそのための練習曲の配列がきわめてシステマティックになされており、どこまでも論理的に指使いの教程を生徒にたたき込む意図が見られた。しかし、第9版では従来までの徹底した機械的な練習へのこだわりや論理的厳密さは見られない。その点では、まずはじめに多少の指使いの原則を説明した後、ほぼ難易度順・習得テクニック順整理された形で「楽曲の体裁をなした小品」が並んでいた初版～第5版の姿に戻っている。

第1版から第9版までの流れから整理すると、第5版を皮切りに指使いの教程に重点を大きく置く方向へと向かい第6版ではまさに極端にまでに論理的に整理された練習曲を中心とした教則本となった。その意図は1825年の第8版チェルニーの改訂でも引き継がれたが、最後の第9版でもその重点は引き継がれたものの、その論理性は希薄となっている。こうした指使いの教程の構成の変化は、改訂者の意図とともに歴史的な背景が反映されたものと考えられるが、それを明らかにするにはこれら膨大な量の練習曲の詳細な分析と共に、他の教本との比較検討を行う必要がある。これについては、次稿以降の検討課題としたい。

《引用文献》

Fortepiano=schule oder Anweisung zur richtigen und geschmackvollen Spielart dieses Instruments nebst vielen praktischen Beyspielen und einem Anhang vom generalbaß. Siebente sehr verbesserte Auflage von August Eberhard Müller Capellmeister in Weimar. Mit einer Kupfertafel. Leipzig bey Carl Friedrich Peters 1819. 《レーラインの教本 第7版》

8. Auflage

Große Fortepiano=Schule von August Eberhard Müller vormals Capellmeister in Weimar. Achte Auflage mit vielen neuen Beyspiele und einem vollständigen Anhang vom Generalbass versehen. Von Carl Czerny Leipzig bey Carl Friedrich Peters 1825 《レーラインの教本 第8版》

9. Auflage

Große Pianoforte-Schule von A.E.Müller, vormals Kapellmeister in Weimar nach den Vorschriften der Kunst neu bearbeitet von Julius Knorr. Neunte rechtmässige Auflage. ErsterTheil, Zweiter Theil bei C.F.Peters 1848 《レーラインの教本 第9版》